

事例 ②

他校のノウハウを 自校に生かす連携

広島県トップリーダーハイスクール支援事業

高校間で切磋琢磨し 連携で学んだ指導を 自校の力とする

広島県の「トップリーダーハイスクール支援事業」(P.7図2)では、5校の進学校が連携し、事業を行っている。広島県立安古市高校に、合同学習合宿と県外大学・企業訪問の様子と、連携の自校への還元方法について聞いた。

他校と合同の学習合宿を自校の指導に生かす

生徒は良きライバルを得て 教師は指導改善の ヒントを学ぶ

2011年度8月、広島県「トップリーダーハイスクール支援事業」の合同学習合宿が、国立江田島青少年交流の家で3泊4日の日程で実施された。難関大を志望する2年生が

対象で、各校20人を上限に募集。安古市高校からは15人が参加した。国語・数学・英語の3教科で県に指定された指導教諭による授業、「無言学習」と呼ばれている自学自習、更に難関大に進学した卒業生の講演が行われる。運営業務は呉三津田高校と安古市高校が隔年で担当しており、今年度は安古市高校の当番で

あった。取りまとめ役を務めた2学年主任の金本仁志先生は、「各校とも参加した生徒の満足度は高く、学習の動機付けとして効果的に機能している」と取り組みを評価する。

「難関大を目指す県内の生徒が120人以上集まり、指導教諭のハイレベルな授業を受けるのですから、とても刺激になっているようです。同じ広島県立高校出身の先輩の話聞き、自分も頑張れば難関大に行けるのではないかと、志望を高め

て合宿を終えています」(金本先生)

合宿では、異なる学校の生徒で班を形成し、同じ部屋で生活する。最初は部屋割りを見て「他校の生徒とうまくやっていけるだろうか？」と不安な表情を見せるが、いざ合宿が始まれば皆すぐに打ち解け、4日間の合宿を励まし合って乗り切っている。合宿終了後も連絡を取り合い、学習の進捗状況を報告し合っている生徒もいるという。

また、合宿は、教師にとっても学

特集 高校間連携で「学校力」を高める

SPECIAL ISSUE

PROFILE

広島県立安古市高校

◎1975(昭和50)年開校。「**仰高**(心豊かな人生の創造を目指し高遠の理想を仰ぐ)」を校訓として、向上心と理想を持って研鑽を続ける人材の育成に取り組む。2009年度から県の「トップリーダーハイスクール」に指定され、学力向上の取り組みを更に充実させている。

設立 1975(昭和50)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数(1学年) 約320人

11年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、名古屋大、大阪大、神戸大、広島大、九州大などに184人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大などに延べ581人が合格。

住所 〒731-0152 広島県広島市安佐南区毘沙門台3-3-1

電話 082-879-4511

Web Site <http://www.yasufuruichi-h Hiroshima-c.ed.jp/>

びの場だという。指導教諭の授業から学んだり、教師同士の会話の中からヒントを得たりするのはもちろんだが、「難関大を目指す他校の生徒に接し、その様子を知ることが有益だ」と金本先生は説明する。

「生徒を見てみると、しっかりあ
いさつが出来る高校、休憩時間から
上手に授業に切り替えられる高校な
ど学校ごとに特徴があります。他校
の生徒と比較しながら、自校の生徒
はどう成長しているのかを確かめ、
これから必要な指導は何かを考える
機会になっています」(金本先生)

更に、合宿中に生徒が挑戦した問
題の解答を分析することで、各校が
どんなところに重きを置いて指導し
ているのかも見てくるといふ。当然、
それは自校に戻ってからの指導の改



広島県立安古市高校
河野幸夫 Kohno Yuki
教師歴23年。同校赴任歴6年目。1
学年主任。地歴科。



広島県立安古市高校
金本仁志 Kanemoto Hiroshi
教師歴27年。同校赴任歴7年目。2
学年主任。数学科。

善のヒントとなる。

合同学習合宿を踏まえて 自校の取り組みを改善する

安古市高校が特に留意しているこ
とは、合同学習合宿の成果を参加生
徒だけにとどめず、学校全体に還元
することだ。合宿の様子などを、生
徒全員に学年通信で報告するだけ
なく、既存の取り組みの改善にも役
立てている。

「夏期ロングラン学習(*)、春季
学習合宿では、合同学習合宿に参加
した生徒の感想を参考に、自学と講
義を選択して学べる時間を設けてみ

他校と合同の大学・企業訪問を自校の指導に生かす

憧れの世界を 他校の生徒と歩く

県外大学・企業訪問は1年生を対
象に8月に行われる。参加生徒数は
各校4~10人程度。事前学習を経て、
東京大訪問、東京大生との座談会、
そして企業や研究所の見学などを3
泊4日の行程でこなしていく。

ました。また、本校は部活動が盛ん
なので、練習のため合同学習合宿だ
けでなく、本校の学習合宿にも参加
できない生徒がいます。そこで、あ
る部では、顧問の発案で練習後、教
室を確保して自学自習の時間をつく
りました。これは顧問が合同学習合
宿に参加した生徒から、「何時間も
集中して皆で勉強する効果」を聞いた
からです」(金本先生)

生徒、教師共に大きな刺激を受け
る合同学習合宿だからこそ、そこで
の学び、気付きを一過性のものに終
わらせず自校の取り組みに取り入れ
ようという意志が同校にはある。

今年度、引率を務めた1学年主任
の河野幸夫先生は「これだけ内容の
濃い研修を、本校1校だけで実現す
るのは困難」と、県教委主導のメリッ
トを率直に評価する。

「憧れ以上の存在である東京大の
キャンパスを実際に歩き、大学生に
高校時代の過ごし方などを聞くこと
で、『努力次第で自分も行けるかも

しれない』と生徒は思うようです。
また、日本を代表するような企業を
訪ね、最先端の研究などを前にした
ときは、本当に食い入るような表情
で見えています。そして、何より他校
の生徒と共に過ごし、宿舎で一緒に
学習に取り組む中で、『自分ももつ
と頑張らなければいけない』と決意
を新たにしています」(河野先生)

3泊4日の体験は、生徒の進路意
識を大いに刺激する。だからこそ、
参加者募集の段階では、学力は高い
が志望がまだ明確でない生徒、学力
的な伸びしろが大きい生徒に教師は
意識的に声を掛ける。また、他の生
徒への波及効果も狙い、参加した生
徒に訪問の成果を冊子にまとめさ
せ、学年集会などの場で報告させて
いるという。

自校の課題を語り合い 信頼関係を築く

合宿を引率する教師は各校一人。
人数は少ないが、それでも情報交換
の場として確実に機能している。
「大学訪問や企業訪問など、それ
ぞれの高校でどんな進路指導の取り
組みが行われているか、いろいろ情

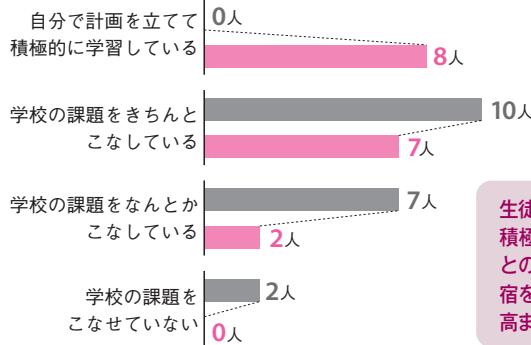
*夏期ロングラン学習では合同学習合宿に準じたプログラムを実施するが、学校の施設を利用し、宿泊はしない

報交換が出来ました。また、他校の教師との間に信頼関係が出来てくると、日々の生徒への声掛けなど、かなり具体的な話も出来るようになりまし。実感したのは、教えてもらうばかりではなく、こちらの実情を隠さず話することが大切だということ。それが出来てこそ、本当に知りたいことが話し合えるのだと分

かりました」(河野先生)
持ち帰った情報は、学年会や教科会などを通して、校内で共有するよう心掛けたという。「そういう指導をしているのだから、A校は実績を上げていくのだろう」といった先輩教師の分析を聞くことで、更に自身身の学びになった、と河野先生は振り返る。

トップリーダーハイスクール支援事業の効果と、自校の指導への還元

① 合同学習合宿に参加した生徒の学習意欲の変化

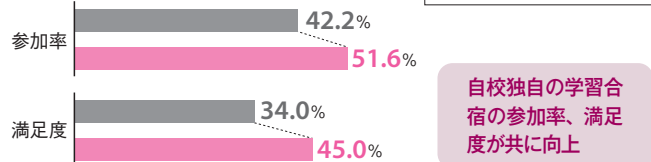


生徒の学習への積極性は、他校との合同学習合宿をきっかけに高まった

上記の成果を踏まえて、同校では2010年度から自校単独の夏期ロングラン学習において、「部活動で全ての行程に参加できない生徒の部分参加」も認めた。

その結果...

② 夏期ロングラン学習での生徒の参加率と評価



自校独自の学習合宿の参加率、満足度が共に向上

*「満足」「おおむね満足」「やや不満」「不満」の4段階のうち、「満足」と回答した割合

*2010年度安古市高校の調査から抜粋

高校間連携を自校の改革につなげる

学び合い、競い合いながら お互いの存在感を高めたい

金本先生も河野先生も「他校からいろいろな話を聞いて学ぶことも大切だが、それをいかに自校に取り込んでいくかがより重要」と口をそろえる。

「県外大学・企業訪問や合同学習合宿での情報交換からさまざまなヒントを得て、既存の取り組みの見直しに発展することもありました。例えば、本校は近年、進路検討会議の運営方法や資料の様式を大きく変えました。これは他校との情報交換をきっかけに後日更に学校訪問などを行って、そこで学んだことを本校用にアレンジし直した結果です。『他校から学び、本校に合った形で取り入れよう』という姿勢は、トップリーダーハイスクールの取り組みに参加していることで強くなったと感じます」(河野先生)

これまでも他校の教師との情報交換はあったが、各教師の個人的なつながりを基盤にしたものであった。それが県で連携の場を設けたことで、組織的に学校単位で交流がしやすくなったと金本先生は語る。

「本校はトップリーダーハイスクール5校の中でも学校の歴史が浅く、チャレンジを続けなければいけない立場です。また、トップリーダーハイスクールに選ばれ続けることが学校のアイデンティティーの一つにもなっています。伸びしろが大きい生徒たちを育てるために、他校から学べることはどんどん学ぼうという思いです。しかし、安易に他校のまねをするということではもちろんありません。本校の取り組みにも、誇れるものはたくさんあります。連携を通して、競うべきところは競い合いながら、公立高校としてのそれぞれの存在感を高めていきたいと思